

生息地の特性を生かしたゲンジボタルの保護活動

松崎町立松崎中学校 土屋武彦

1. 松崎中学校ゲンジボタル保護ボランティアの発足

松崎中学校ゲンジボタル保護ボランティアの発足は、1998年に以前から保護活動を行っていたゲンジボタルの生息地が台風の被害を受け、復旧作業の協力を生徒に呼びかけたことから始まる。生徒とともに今まで行ってきた主な活動は、生息地の特性を知り、その特性を生かした環境づくりである。生息地と同じような環境にしていくことにより、ゲンジボタルの保護につながると考えた。保護活動も今では、地域の関心が高まり、一般の方の協力や小学生の自然体験活動との連携事業として行われるなど、活動の輪が広がりつつある。保護活動は、町の中心を流れている川で行われているが、今まで台風などの増水で川の州や流れの様子が一変してしまい、保護活動の苦労が無駄になってしまったこともある。

2. 河川の州における小川づくり

保護活動は川の州の中での小川づくりから始めた。ゲンジボタルの生息地は、
① 山を背にした大きなアシの州がある。
② 州には主流から分岐した小川や山の沢からの水が流れ込んでできた小川がある。
などの特徴がみられ、アシの州に流れている小川とゲンジボタルの生息が関係していると考えたのである。

最初の小川づくりは、生息地の1つで最も大きな州のあるところである。山から流れ込んできた沢の水が州のところで分岐し、1つは下流に流れ60mほどの小川となり本流と合流。もう1つは、反対側40m程先で流れがせき止められ、川幅約3m、深さ1mの細長いため池になっていた。水は不透明、溢れた水は下流の小川に逆流していた。本流までは20m程であった。この部分を掘り抜けば約60mの小川になるところであった。本流への水路づくりは、生徒たちのスコップによる手作業。最初は、地表が砂地で順調に進んだ作業も、次第に竹の根や石の層で思うように作業が進まなくなった。深いところで1mも掘り下げ本流への水路を完成させた。川岸には、カワニナの好むクレソンやセリなどを植え込んだ。



水路ができてから5年が過ぎ、周辺の竹も切り取られ整備されてきた。そのため日の光も射し込み、今では草も生え自然な小川になった。ゲンジボタルも数匹ではあるが小川の上を飛び交うようになってきている。

川の州の中には、アシに覆われた小川や枯れ草などが詰まっている小川も見つかり、それらを取り除き、流れのある自然な小川にしていった。また、途切れ途切れになっている小川や小川の跡に水路を掘りつなぎ100m以上の小川にもしていった。州の中のできた小川には、カワニナの生息地になっているところも発見できた。

3. ワサビ田づくり

私たちの町は、昔からワサビの生産が盛んに行われているが、ゲンジボタルの発生するワサビ田が何カ所か確認されている。調査によると、カワニナはワサビを好物にしてワサビ田によく発生する。生産者は駆除に苦勞するほどである。



また、ワサビ田は、適度な流れがあり小石まじりの砂利であるため、ゲンジボタルの幼虫の生息にも良い環境であった。自分たちでワサビ田をつくりゲンジボタルをもっともっと生息させようと、小川づくりと平行して3年間かけ生息地付近にワサビ田を完成させた。これから、ワサビの生育に従いカワニナを養殖し、ゲンジボタルを生息させる試みも計画している。